



## 学年団を訪ねて

# あたり前を丁寧に見直しながら、 生徒支援のアイデアを活発に出し合う

長崎県立松浦高校 1学年団



### 学年団が直面した課題

- ◎普通科の特色化・魅力化を図るために新設された地域科学科の入学者が、定員を大きく下回った。
- ◎高校入学までに、高い目標を掲げて主体的に行動する力や自己肯定感などが十分に育まれていない生徒が増えていた。

### 学校概要

2017年度から、生徒が地域課題をグループで調査・研究し、松浦市へ政策提言する「まつナビ」を実施。20年度からは、文部科学省の委託事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、「まつナビ・プロジェクト」へと発展。さらに22年度からは「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の指定を受け、普通科改革に取り組む。松浦市、長崎大学、長崎県立大学、松浦市商工会議所、松浦市内の企業等がコンソーシアムを形成し、同校の2つの文部科学省委託事業の活動を支援している。



**設立** 1961(昭和36)年

**形態** 全日制/地域科学科・商業科/共学

**生徒数** 1学年約50人

**2021年度進路実績(現役のみ)** 国公立大は、長崎大、長崎県立大に4人が合格。私立大は、國學院大、東洋大、関東学院大、関西外国語大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学20人。就職17人。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

## 普通科改革のパイロット校として 新しい一歩を踏み出す

長崎県立松浦高校は、松浦市、大学、企業・経済団体などと連携し、高校3年間を通じて地域課題を探究する学校設定科目「まつナビ・プロジェクト」を実施している。新学習指導要領で示された資質・能力を地域と連携しながら育成する同校は、これまでも注目を集めてきたが、2022年度の1学年団は、さらに大きな変革の当事者として全国の注目を集めることになる。それは、同学年が、22年度新設の地域科学科の1期生を担当するからだ。高校改革の一環である普通科の特色化・魅力化を図るため、22年度から普通教育を主とする学科の中に普通科以外の学科を設置できるようになり、同校は、普通科に代えて地域科学科を創設した。

しかし、「進学に不利になる」「課題の探究だけに取り組む」といった誤解もあり、地域科学科の1期生の入学者は定員を大きく下回った。そうした状況の中、1学年主任を務めることになった相原美詠先生が、船出にあたって学年団の教師に伝えたのは、「生徒が毎日楽しく登校できる学年づくり」というシンプルな方針だった。

「本校の生徒は素直で、教師に言われたこ

とにはきちんと取り組みますが、主体的に行動したり、高みを目指したりすることを躊躇しがちです。また、ここ数年、自己肯定感が十分に育まれていない生徒の増加がかなり思っていました。『まつナビ・プロジェクト』を充実したものにするためにも、あらゆる教育活動を通して、自ら考え、律し、行動する力を生徒に育みながら、自己肯定感を高めたいという私の思いを、先生方に伝えました」

キャリア形成部副主任で、「まつナビ・プロジェクト」のリーダーを務める茶園孝一先生は、現状をプラス思考で捉えることで相原先生の方針を後押しした。

「地域科学科の1期生は定員割れになってしまったけれど、その分、生徒一人ひとりにじっくり向き合おうと、学年団の先生方と話ししました。すると、『この学校に期待してきてくれたのだから、それぞれのよいところを伸ばしてあげたいですね』といった前向きな言葉が飛び交い、これから始まる1年間への期待を互いに高め合い、スタートを切ることができました」

### 生徒に自信をつけさせるため、 新たな指導を学年会で企画

相原学年団では、時間割の中に組み込まれ



## リーダーに聞く！ 5つのQ&A

**Q** どのようなチームを目指しましたか？  
担任の先生が苦勞を1人で背負い込むことがない学年団を目指しました。

**Q** リーダーとして心がけていることは？  
明るい学年団づくりです。私はそっかしく、それを先生方にどんどん指摘していただき、時には笑ってもらいたいと思っています。そして、大変な仕事ほど、学年主任の自分が率先してやるようにしています。

**Q** 学年団としての「成功」は？  
生徒は明るく元気に、そして先生方は自分の得意分野を發揮し、日々を過している状態です。

**Q** リーダーとして自覚する  
長所は何ですか？

前向きなところです。毎日いろいろなことがあって、へこむこともあります。少し時間が経てば、くよくよしては駄目だと、気持ちを切り替えることができます。

**Q** リーダーとして自覚する  
短所は何ですか？

緻密さに欠けていると自覚しています。直感で新しいことを始めてしまい、あとになって「これはすごく大変だ！」と気づき、焦ることがあります。





松浦市の魅力を授業で学ぶ

その後、生徒と1学年団の教師が、地域の行事を見学



松浦高校の教師の多くは、松浦市外に居住している。「自分たち教師も、地域に対する関心をもっと高く持つべきではないか」という学年会での問題提起を受けて、学年団の教師たちは、生徒とともに、地域の伝統行事を見学した。地域を知ろうとする教師の姿も、生徒にとって学びの材料の1つになっている。

た45分間の学年会を毎週欠かさず実施し、生徒についての情報交換や指導の目線合わせを行った。「まつナビ・プロジェクト」の活動については最も時間を割いて話し合い、生徒の様子も丁寧にも共有した。活発なコミュニケーションを重ねるうちに、担任から様々な問題提起が行われるようになった。学年団最年少で地域科学科担任の田中輝一先生は、成

績上位層の引き上げを相原先生に提案した。

「成績上位層の生徒の向学心を喚起するためには、特別感のある取り組みが必要だと考えました。そこで、国語、数学、英語の3教科について、成績上位者を選抜して、添削指導を行うことを提案しました」

一方、成績下位層の生徒の支援にも着手した。地域科学科の担任で、英語科の担当の麻生千絵美先生と、商業科の担任で、数学科の担当の中田紀子先生、そして国語科の担当の相原先生が話し合う中で、「成績下位層の生徒は、文章を書くことに抵抗感を持っているのではないか」という仮説にたどり着いた。

「文章を書くのが苦手な生徒でも取り組むことができる新聞のコラムの書き写しや、記事の感想を書かせる活動を、学年会で提案しました」（相原先生）

そして、取り組みの成果は、すぐに学年団で共有した。

「添削指導を受けている生徒の中には、定期考査の結果で上位を維持するだけでなく、ほかの生徒に勉強を教える姿が見られるようになるなど、リーダーとしての人間的な成長も感じています」（田中先生）

「成績下位層の生徒についても、記述式問題に粘り強く取り組むようになったり、思ったような解答が書けなかった時は個別に質問に来たりするなど、書くことを諦めない雰囲気

気が醸成されていると感じます」（中田先生）

茶園先生は、「学年会では毎回、各先生からいろいろなアイデアが出ますが、どんなアイデアも否定されることはなく、どうすればよりよい形で実現できるかを話し合っています」と、学年会の前向きな雰囲気の説明する。

「こんな力が身についたら、生徒はもっと学校生活が楽しくなるはずと、教師としてできそうなことや、やってみたいことを、皆が遠慮せずに提案することができています」

「生徒のために」を胸に、  
教育活動の本質を問い直し続ける

教育活動の軸である「まつナビ・プロジェクト」の充実のため、学年団が力を入れているのは、一つひとつの活動の意義を確認し、前年踏襲に甘んじないことだ。

「私や茶園先生がたき台として出す活動案を、今年度の1年生の実態に合った内容になっているかという観点で、学年団の先生方で確認してもらいました。例えば、松浦市の魅力を発表する活動は、例年は班ごとで行っていましたが、今年度は一人ひとりの達成感を高めるため、班による発表の前に、個人によるレポートの作成を組み込みました。また、地域課題についても、資料だけではなく、校外に出て地域の人々の声を拾い、それらを基



## 学年団を訪ねて



**田中輝一** たなか・きいち  
1 学年地域科学科クラス担任  
教職歴 4 年。同校に赴任して 1 年目。  
理科。



**麻生千絵美** あそう・ちえみ  
1 学年地域科学科クラス担任  
教職歴 20 年。同校に赴任して 8 年目。  
英語科。



**中田紀子** なかた・のりこ  
1 学年商業科クラス担任  
教職歴 30 年。同校に赴任して 4 年目。  
数学科。



**茶園孝一** ちやえん・こういち  
キャリア形成部副主任、  
まっナビプロジェクトリーダー  
教職歴 15 年。同校に赴任して 5 年目。  
地理歴史・公民科。



**相原美詠** あいはら・みえ  
1 学年主任  
教職歴 27 年。同校に赴任して 3 年目。  
国語科。

にして調べるよう指導するといったアイデア  
が出され、実現しました」（相原先生）  
また、各クラスでの発表を素案として出し  
た相原先生に、麻生先生が「学年全体で行い  
たい！」と提案した。  
「2 学科とも特徴ある学科ですから、互い  
の発表を聞くことで、多様性を学ぶ場にもし

たいと相原先生に提案したところ、受け入れ  
てもらえました。実際、地域科学科の生徒は、  
商業科の生徒が作成したプレゼンテーション  
のスライドを見て、『高校生がこんな立派な  
スライドを作成できるのか』と驚いていまし  
た」

22 年度のスタート時に学年団で目線合わせ  
をした、一人ひとりの生徒に向き合う指導は  
今も続いている。「まっナビ・プロジェクト」  
は、2 年次からはグループ探究が本格化する  
が、1 年次の 3 月に決めたテーマについて、  
「そのテーマで納得しているか」、「グループ  
活動で困っていることはないか」、「キャリア  
形成につながるのか」と聞く面談をわざわざ  
生徒一人ひとりで行ったのも、「どんなに順調  
に見えても、不安や不満は必ずある。それら  
に耳を傾け、時には手を差し伸べ、解消させ  
ることで、生徒の活動への納得度が高まるは  
ず」という、学年団での総意によるものだった。  
「新しいことを始めるのは容易ではありま  
せん。でも、学年団の先生方と、『これは生  
徒のためになるね』と確認し合うことで、  
『少々大変でも、やってみよう』という気持  
ちが皆に生まれてくるのです」（相原先生）  
日々の指導においても、各自が工夫を凝ら  
し、その取り組みを共有している。

「麻生先生は、自ら発信できる生徒を育て

### \* 学年団 輝きのポイント \*

- \* 定員割れという現状を受け止め、生徒一人ひとりに丁寧に向き合うことを教師全員が心がけた
- \* どんなアイデアも否定せず、どうすればよりよい形で実現できるかを話し合える雰囲気、学年主任が率先してつくった

るため、授業中の問いかけでは、生徒が挙手  
して発言するまで待つことを徹底していま  
す。また、中田先生は、相談事がある生徒が  
気軽に話しかけられるように、ホームルーム  
前後の時間などは、職員室ではなく、教室に  
極力いるようにしています。あたり前の日常  
の中の先生方の工夫によって、学校は生徒  
にとって毎日楽しく登校できる場所になっ  
ていくのだと思います」（相原先生）  
高校改革を先駆ける松浦高校。誰もが注視  
するその行く末は、1 学年団の教師が日々生  
徒に見せる笑顔のようにきつと明るい。